

(別紙1) 技術士機関誌：投稿論文について

「2011増刊号 特別企画—技術士の活躍の姿」に掲載された浜崎学氏の論文「低炭素社会の基幹エネルギー源、原子力と技術士の役割」に対するコメント。

平成23年7月25日

大野知彦（おおの ともひこ）

技術士（電気・電子部門）

大野システム技術研究所代表

e-mail : tk-ohno@icom.home.ne.jp

「低炭素エネルギー源としては原子力以外に無い」と格調高く謳われ、原子力を正しく理解しないが故の忌避感という「迷信」、負荷追従運転ができないという「迷信」、稼働率が低いという「迷信」、FBRは世界各国が放棄したという「迷信」、原子力関係者は情報を公開していないという「迷信」、これらを正していくのが技術士の重要な役割であると力説・主張されている。

私は電気・電子部門の技術士であり、原子力部門は専門では無いが、今回の浜崎技術士の論文（大震災発生以前の執筆）や大震災以降のマスコミ情報などを読むと技術的な違和感を感じる。

かつて、米国ロスアンゼルス地震で高速道路の橋げたがもろくも破壊された時、日本の専門家は「日本では絶対にこのようなことは起こらない」と断言されたが、直後の阪神淡路地震では同様な事故が起こった。そのことについて誰も、どこからも釈明の発言が無かった。

今回の事故についても、かつてロシアや米国で原発事故が起こったとき、「日本では絶対にこのような事故は起こらない。つい直前の昨年12月のNHKTV番組でも日本の原発は絶対安全である」と専門家が宣言されたが、もろくもその安全神話は破れ、「想定外」という政治発言が氾濫した。

そして「脱原発」宣言が出る始末である。つい今年のエネルギー基本法では原発の依存度を拡大するという方針が決定されたばかりであり、いくら事故が発生したからといって急転直下、国の基本方針を180度覆すというのはいかにもお粗末である。

原発に関する一般国民の不安感、不信感はその一方である。その要点は次の4点に集約できる。

放射能廃棄物の処理問題：

原発運転に伴い大量に発生する廃棄物の処理方法は未解決のまま見切り発車している。ガラス容器に密封して地下に埋めるとか、海底に沈めるといった案も聞くがとても抜本的な解決策だとは思えない。

FBRにしても燃料の利用率は向上するが、放射能廃棄物の発生は避けられない。放射性廃棄物で地球全体が汚染されるのではないか。

放射能の危険さ：

一般の国民は原発＝原爆という認識である。とんでもない手違いが発生して原爆と同じように爆発するのではないか、死の灰が降るのではないかという不安がある。原爆とは核反応過程が全然違うので全く問題ないという説明では納得できない。

発電コスト：

火力、水力に比較して格段に安価であるというが、コスト要因としてどこまで考慮されているのか、地震、津波などの自然災害に対する安全係数を高めれば幾何級数的にコストは増大するであろう。さらに放射性廃棄物の処理コストはどこまで勘案されているのか。発電コストが安いというのは政治的

なねつ造ではないか。

CO2 削減に寄与する：

核燃料抽出過程や周辺工程で CO2 排出の要因は本当はないのか。発電以降の工程についてのみ注目していないか。

科学技術に詳しい専門家が国家運営のトップに居ながら昨今の対応は全く非論理的である。日本の科学技術の底の浅さを思い知らされて残念である。国際的信用もがた落ちである。日本技術士会独自で事故調査を実施、定量的な評価ができないだろうかと思う昨今である。ストレステストなどやっても全く無意味である。

浜崎学氏に問いたい。本稿は安全神話が生きていた時点での論文である。2011年3月11日の大震災事故以降、現時点で再投稿されたらどのような内容に改訂されるであろうか。

以上